近江の大般若経（だいはんにゃきょう）

大般若経（だいはんにゃきょう）は正しくは大般若波羅蜜多経（だいはんにゃはらみたきょう）といい、六百巻を一具とする仏典中最大の経典です。仏典の総称を大蔵経（だいぞうきょう）または一切経（いっさいきょう）と呼んでいますが、その総数をほぼ六千巻としますと、約一割を占めるのが大般若経ということになります。

大般若経が現在流布しているような構成を持つに至ったのは７世紀の頃で、『西遊記』で著名な三蔵法師玄奘（げんじょう）によって集大成され漢訳されたのです。

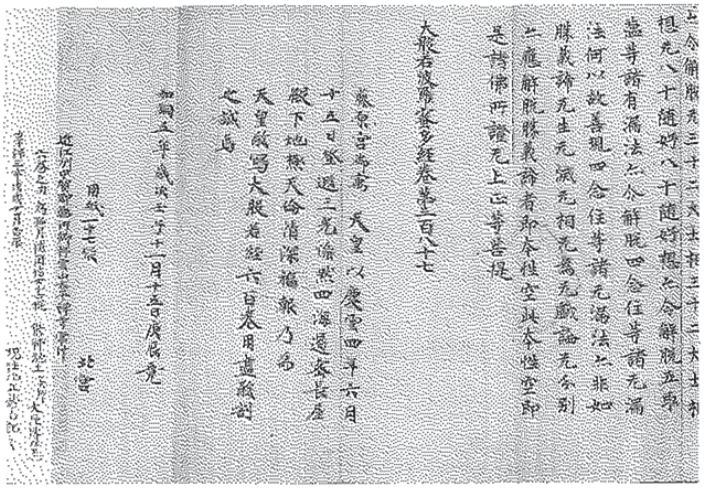
「般若波羅蜜多」はプラジュニャー・パーラミターを音写したもので、プラジュニャーとは「知恵」を、パーラミターは「完成・至高・到彼岸」などの意味で、「知恵の完成」と訳されています。大般若経は仏教思想の根幹である「空」の思想や六波羅蜜（菩薩の実践徳目）などを説いたいろいろな般若経典を集大成した経典なのです。例えば、大般若経は十六会（16章）から成りますが、第二会は「大品般若経」、第四会は「小品般若経」、また第十会は「理趣経」に相当するように、〈知恵〉の完成（般若経）を説いた般若経典が集約構成された一大仏教書であるわけです。

今、玄奘が漢訳したものでその字数を試算しますと、経典の１行に17字詰で１紙28行宛に書かれ、その紙を15紙継ぎ合わせて１巻としていると仮定して、それが六百巻あるわけですから、

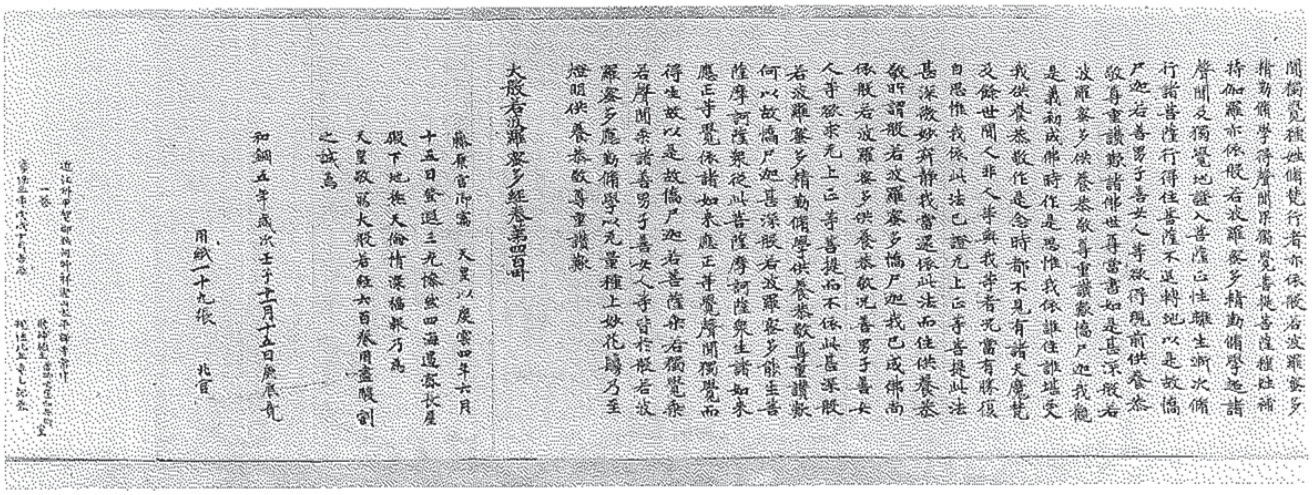
17（字）×28（行）×15（紙）×600（巻）＝4,284,000（字）すなわち、少なく見積って約400万字の漢字で書かれているのです。滋賀県内に伝来するある大般若経の跋文（ばつぶん）（その書物の成立・内容・伝来等に関する文で、主に巻末に書かれている）によると、一人の筆者が１巻を書き写すのに、平均３日または４日を要していますので、３日としても１ヶ月で約10巻、１年で120巻ですから、600巻では一日も休むことなく書写しても５年の歳月を要することになります。

経典を書写する場合、数人の結縁者（けちえんしゃ）で分担執筆（これを合筆経（がっぴつきょう）という）するのが普通ですが、なかには自分一人で完成した人もあり、その情熱には驚かされるばかりです。（さらに一切経を41年もかかって１人で書写した色定法師一切経も九州宗像社（むなかたしゃ）に伝来する）

さて、わが国古代においては、大宝三年（703）文武天皇は平城京内の薬師・元興・大安・興福の四大寺に詔して大般若経を転読（てんどく）せしめたことが正史に見えますが、さらに和銅元年（708）元明天皇は毎年読誦せしむべきを命じて以来、大般若経を転読する行事（大般若会）が恒例化し、国家の安寧を祈る経典として重要視されました。平安時代には顕密（顕教と密教）の別なく、諸



図版１　長屋王願経　太平寺蔵



図版２　長屋王願経　巻末跋文　太平寺蔵

大寺で大般若会が謹修され、国家鎮護・防災などの期待をもって、公私を問わず全国に流布していったのです。

中世に入ると、疫病や農作物に害を与える害虫を村外へ送る「虫送り」の行事等とも結びつき、有力村落では大般若経を所持し、その都度大般若経の転読が行われるようになります。このように大般若経転読が国家安寧にとどまらず、農業経営においても重視されるようになると、手間のかかる書写だけでは需要に間に合わず、大量生産を可能にする印刷経（版経）まで作られるようになり、奈良興福寺を中心に開版摺写された春日版など中央の版経だけでなく、地方においても開版され、多くの遺品が残されてきました。先述したように、大般若経は仏典中最大の経典であるにもかかわらず、最も多く制作された経典と言えるのではないでしょうか。従って、日本の歴史を考える場合、各地に伝わる大般若経に書かれた記録は、わたしたちに多くの情報を提供してくれるのです。

ところが、一昔前までは一部の著名な遺品を除いては、歴史の資料としては大般若経から情報を得ることはあまり行われませんでした。その理由は大般若経の中には巻子装（巻物）のものが多く、取扱いが面倒であること、また最近では転読をしなくなり蔵の奥深く仕舞われ人目に触れることが少ないことや、その結果虫に食われたりして、披見が困難であったからです。しかし、近年大般若経に対する再認識の気運が高まり、各地で調査研究が進められつつあります。この反面、多くの人々の手に触れることによって少しずつ、傷みが進行することもあり、大般若経の再評価が文化財の破壊につながらないことを願うばかりです。昔の人々の生の声を伝える大般若経に手を差しのべ、次代にどのように伝えていくかを今真剣に考える時期にきているのです。そして、その保存方法について、過去の人々の英知に耳を傾けることからはじめなければなりません。

それでは滋賀県内に伝来する大般若経を紹介しましょう。

近江を代表する大般若経といえば長屋王願経でしょう。これは土山町の太平寺（国宝・142帖）、常明寺（国宝・27帖）、見性庵（重文・43帖）にまとまって伝来しています。天武天皇の第八王子高市皇子の長子で、奈良前期の政治史に大きな影響を与えた長屋王が、文武天皇の崩御（慶雲４年）を悼んで、和銅五年（712）11月15日発願書写せしめた大般若経で、大般若経としては現存最古の遺品です。600巻のうちほぼ⅓の巻数が土山町内に伝来する理由は今のところ不明なのですが、跋文を見ますと、江戸時代の中期頃までは観音寺山（安土町）の桑実寺に伝えられていたこと

図版３　釈迦十六善神像（大般若会の本尊として題用される）
聖衆来迎寺蔵

がわかり、享保年間（18世紀前半）に現有になったことが知られます。

この経本をよく観察しますと、麻の繊維から漉いた麻紙と呼ばれる紙で、紙の表面をよく叩いて整形し、書写にあたって墨が滲まないよう表面加工が施されています。また防虫効果のある黄蘗の樹液で黄色に染められており、加えて黄色が美しい紙面をかもしだしています。奈良時代の抄紙技術の高さを知る重要な資料といえますが、この時代に広くこのような紙が使われていたとは考えられません。奈良時代の文書の料紙を見ますと、もっと粗悪な紙が使用されているからで、写経用紙を基準に奈良時代の一般的な製紙技術を押し測ることはできないのです。写経の用紙はその時代の最高の技術の到達点を示すと考えるのが妥当といえるでしょう。

次に書風について見ますと、界線を施さず、やや小振りの楷書体で書かれています。この書風は、もう少し時期が下がる天平期の書風が大振りで重厚な唐風の楷書を手本にしたことに対し始筆の筆先に強い打込みのない点に特徴があり、字姿もやや低い六朝・隋風が感じられます。この大般若経は当時中央政界で最も権力のあった長屋王が自らの別邸である北宮に優秀な写経生を集めて書写せしめたものであり、当時の書風の嗜好がうかがえる作品です。とすれば、奈良前期と中期（天平期）とでは書風に対する好みに変化が生まれたと考えられるのです。当時写経のためのテキストは中国から請来される諸本であり、そのテキストがわが国の書風に大きな影響を与えました。奈良時代中期の写経事業が、天平７年（735）に帰朝した遣唐使僧玄昉の諸来経が根本のテキストとなっていますので、前期から中期にかけての書風の変化は、玄昉の帰朝によってもたらされた中国唐の最新の文化の流入と無関係ではありません。その意味で長屋王願経は隋の文化をわが国に伝える作品としても貴重であるわけです。

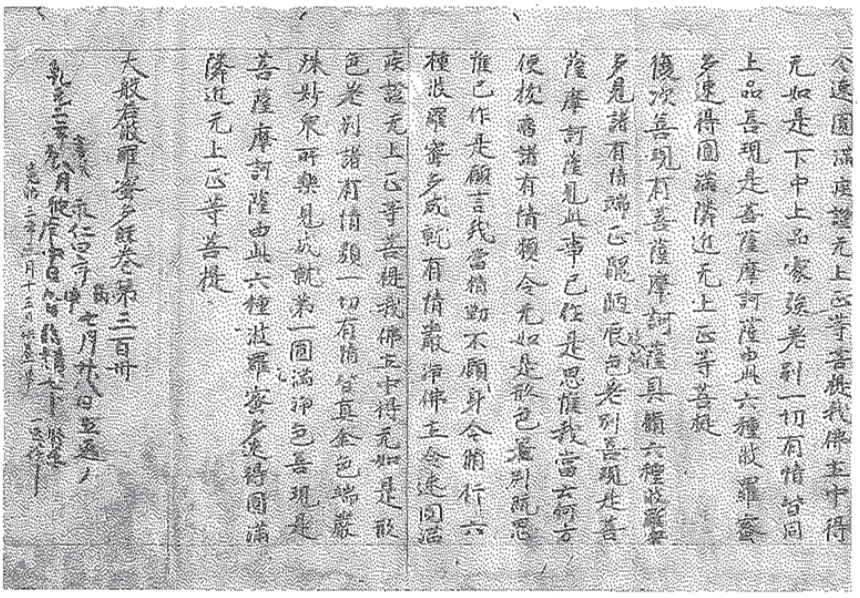
次に安曇川町北船木の若宮神社には、11世紀頃（平安後期）に書写された大般若経が伝えられています。六百帖のうち、傷んだり、汚れたりしたため後に補われた巻が若干ありますが、書写当時の原本がほぼ残っていることは注目されます。それに加えて、ほぼ六割におよぶ巻数に本経が伝来してきた経過がわかる奥書（伝領奥書という）や修理記、供養記等の墨書が見え、その墨書を整理することで、約一千年間の歴史の情報が得られるのです。年記の最も古いのは、寛治三年（1089）銘の供養記（巻330）です。この奥書はきわめて簡単にしか書かれていませんので、どこで、だれが、なにを供養したのか正確には知り難いのですが、本経の紙質、あるいは中国風の書風を脱して柔らかで粘りのある、いわゆる上代様の書風（11世紀以降に見える書風）を示していることから、この供養は書写完了のための供養であったと思われます。また、各巻の首題下には「願主僧隆昭」の墨書があり、

この筆跡と寛治三年の供養銘の筆跡が同一ですので、この供養は発願者隆昭を中心にしてとり行われたのでしょう。この隆昭という人物については他に徴すべき資料がありませんので、どのような僧であったかは判明しないのですが、巻392の奥書に、建久三年（1192）4月8日付で百済寺僧珎榮がこの大般若経を修理し、百済寺東谷の無量寿院に収めた修理記があります。これらのことを総合すると、本経は恐らく11世紀後半百済寺の僧隆昭を発願者として書写され、寛治三年に書写供養されたのですが、ほぼ百年後、本経の傷みが進んだので、東谷僧珎榮によって修理を受け百済寺の無量寿院に保管されたと考えられます。

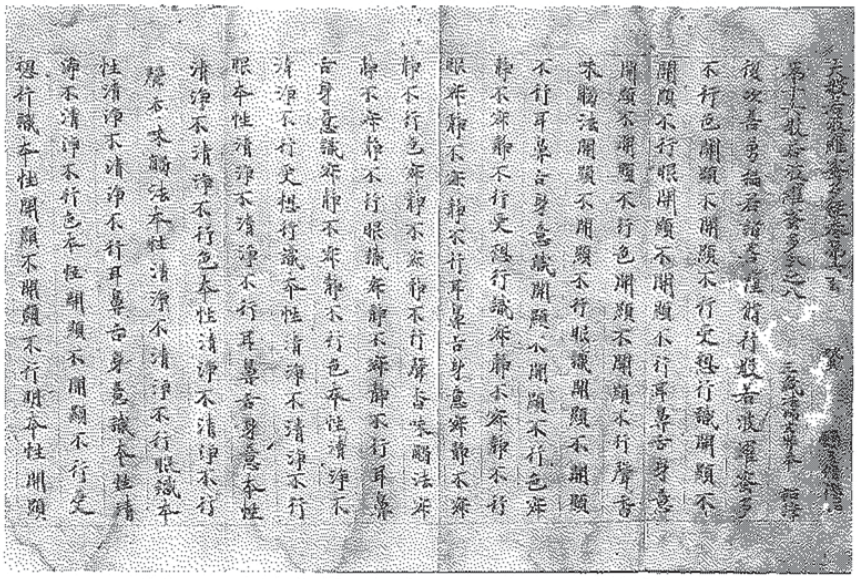
その後、鎌倉時代を通じて百済寺に伝来していたようですが、暦応三年（1340）頃、伊賀国予野庄の池辺社（現三重県上野市）へ移されました。この移動にあたっては、平家保および東寺流審祐の二人が大きく関与したことが知られます。この時、本経には、

伊賀国予野庄池邊社御経也（平家保 東寺流審祐）

の墨書が多く書かれました。



図版4　大般若経　巻第三三十　若宮神社蔵

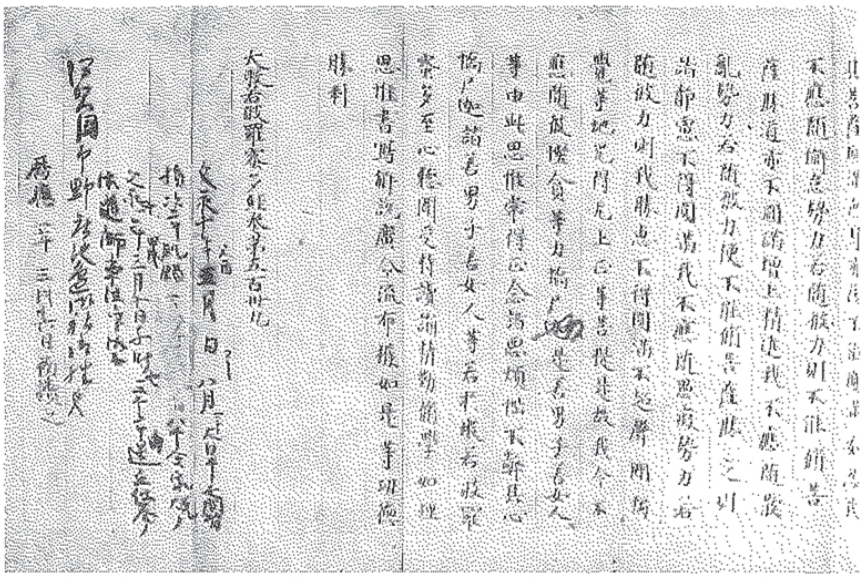


図版5　大般若経　巻第六百　巻首　若宮神社蔵

室町時代に入ると再び近江国へもたらされ、文亀三年(1503)には現在地の北船木若宮神社へ施入されたのです。この施入にあたっては当時地頭であった高島七党の流田中長綱や庄官地下人等の勧進があったことが知られ、また、本経は本来巻子装であったのですが、ここで折本装に改装されていることがわかります。若宮神社本に限らず、他の大般若経においても中世のある時点で、巻子装から折本装に改装されることが多く見られるのですが、これは単に本の形態が変わったというだけでなく、大般若経の読み方が中世になって変わっていくことを示しており、さらに言えば、大般若経に対する期待感が質的変化をうけたことを示唆していると考えることができます。

現在、あちこちのお寺で大般若会が行われていますが、僧が般若心経を口唱しながら頭上でアコーデオン状に折りたたまれた大般若経を扇のようにパラパラとひろげる情景をご覧になったことがあるでしょう。この方

法を転読（てんどく）といい、扇状にひらくことでそのお経を読んだことになるのです。因みに実際に書かれた経文を読むことを真読（しんどく）といいます。中世の大般若会で転読を行うことが多くなったことは、経文自体が重要ではなく、仏前において六百巻という膨大な経典を多くの人々が繰るという協同作業に、災禍ををもたらす悪霊等を退散させる力があると信じられるようになった結果なのです。



図版６　大般若経　巻第五三九　若宮神社蔵

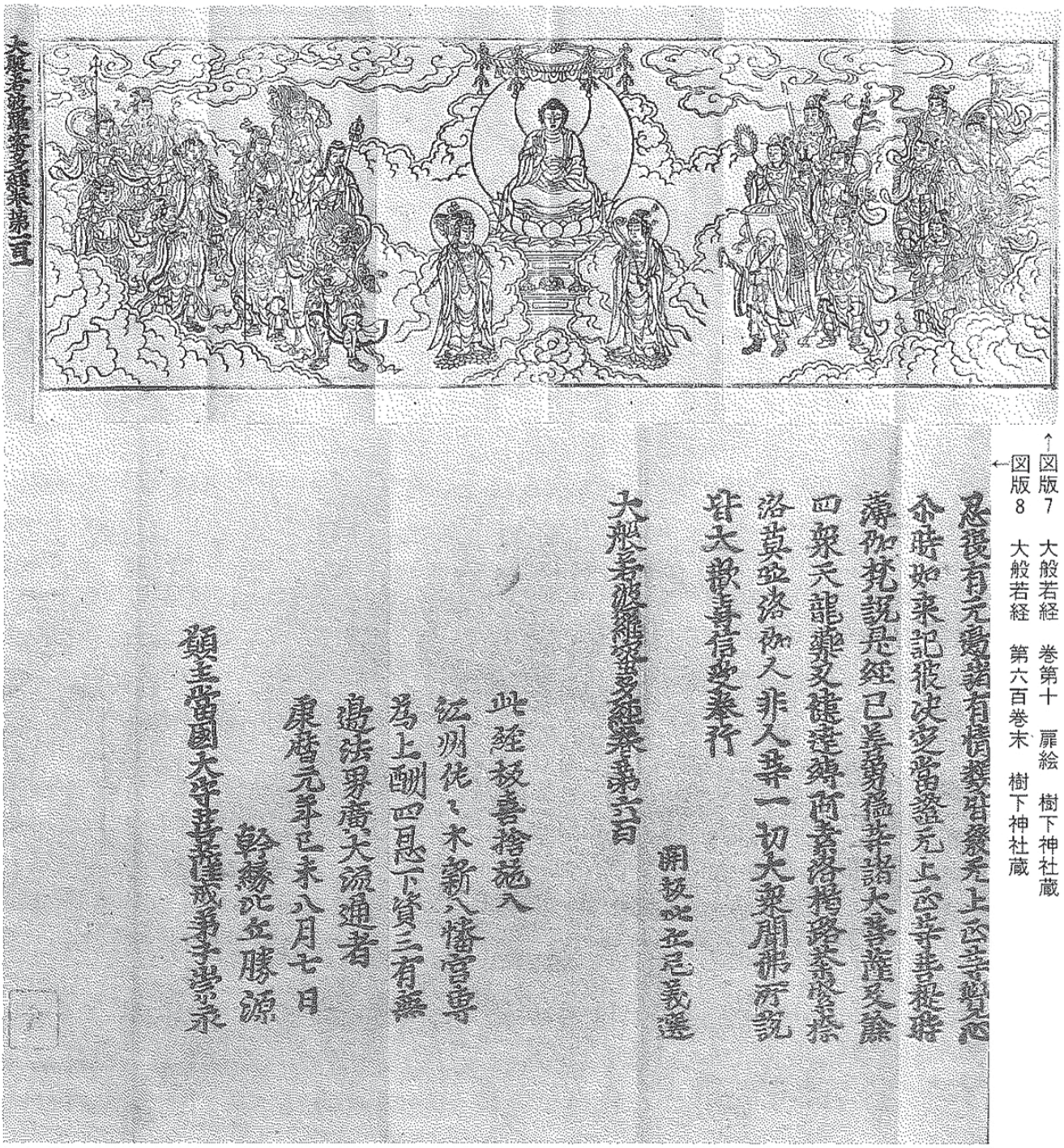
さて、その他に本経の各巻には興味深い内容をもつ奥書がみられます。例えば、百済寺は明応七年（巻539）の焼失が史料上の初見と考えられていたのですが、それをさかのぼる200年前には堂塔八十余宇が焼失した記録がこの大般若経の巻539に見られます。また、巻516、517には「京中在事、自関東御使二人上洛」とあって、他の史料と併せ読むことで、この関東御使の上洛は再度の元寇（弘安の役）に備えて、その対応を京都朝廷と協議するための上洛であったことが知られ、当時の緊迫した社会情勢の一端が刻々と伝わってくるのです。また、「世間飢饉」、「田虫食土」、「六月大風、八月大風、雖吹作物、無損、世中大吉也」等、農業経営の事情を示す記事もあり、中世において大般若経が農村と深く結びついていたことが窺えるのです。

次に版経について紹介しましょう。

志賀町北小松の樹下神社には、「康暦元年（1379）８月７日願主当國大守菩薩戒弟子崇永（えい）（六角氏頼）」等の刊記をもつ版本大般若経六百帖が伝来しています。版経とは木版で紙面に印刷した経本のことで、その印刷する行為を摺写（しゅうしゃ）あるいは摺印（しゅういん）と呼びます。樹下神社の大般若経は黄蘗（きわだ）で染めた楮（ちょし）紙（黄蘗には防虫効果がある）に一行17字宛に印刷されています。このお経の約1/5の巻数に開板願主名があります。例えば「開板実尊」・「開板左近」等の僧俗の名がみられ、これらの人々が版木の開板や摺写にあたってお金を出したり、何らかの助縁を行った人たちなのです。

かってこの大般若経は佐々木六角氏頼が大願主になり、勝源を中心に僧俗の結縁（けちえん）を得て開版摺写したと考え、崇永版大般若経と呼ばれてきました。確かに本経と同じ版木で摺写し、氏頼の名が刻まれた大般若経が、安土町正禅寺、徳島県勝浦町妙音寺、尾道市西国寺、愛媛県伊予市伝宗寺に伝来しており、六角氏頼に関係する大般若経が多いのです。しかし、滋賀県教育委員会で実施されている大般若経調査の結果、同じ版木を使いながら、巻第六百巻末に前記の氏頼云々の刊記がないものも発見されつつあります。とすれば、この版本大般若経の版木が必ずしも六角氏頼によって開版されたとは言えなくなり、崇永版と呼ぶことは正確でないのです。恐らく氏頼が注文した分だけ、先述の刊記が摺り込まれたのでしょう。では、その版木はどこで開板されたかという問題については、今のところ奈良あるいは京都かとしか言えないのです。

北小松の集落では、毎年の氏子総代をはじ



↑図版7　大般若経　巻第十　扉絵　樹下神社蔵
←図版8　大般若経　第六百巻末　樹下神社蔵

め、村の世話方が、巻第1、584、600の三帖を三宝に奉安して、村境を巡幸し、悪霊等が村内へ入ることを防ぐ行事が行われています。この行事は大般若経が呪術と結びつき、悪霊退散に大般若経の力が期待された中世の遺風が、形を変えながらも、今日まで連綿と伝えられてきているのです。

以上、近江に伝わる大般若経を紹介しながら、大般若経にまつわる習俗等にも触れてきましたが、紙面の都合上紹介できなかった事柄がまだまだたくさんあります。個々の大般若経に隠された歴史の証言に耳を傾けることによって、わたしたちは民衆の息吹きや文化の底流を掘り起こすことができるのです。

（土井　通弘　氏提供）